

日本のニュース番組における暴力・向社会的行為の描写の特徴[†]

堀内由樹子*・佐渡真紀子*・鈴木佳苗**・長谷川真里*・坂元章*

お茶の水女子大学*・筑波大学**

本稿は、日本のニュース番組の内容分析によって現在のメディア状況を明らかにし、メディア・リテラシー教育に必要な情報を得ることを目的としている。米国の National Television Violence Study (1996-1998) をもとにコード化マニュアルとコード票を作成し、サンプル・ウィークから計54時間29分、57本のニュース番組を抽出して、その暴力および向社会的行為の描写の頻度と文脈を分析した。その結果、暴力描写は7割の番組で見られたが、行為への罰などその悪影響を抑える文脈も見られた。一方、向社会的行為描写は数が少なく、他のジャンルより行為の学習を促す文脈が少なかった。

キーワード：内容分析, 暴力描写, 向社会的行為描写, ニュース番組, メディア・リテラシー教育

1. はじめに

現代の日本の社会において、私たちはテレビなどのメディアを通して様々な情報を得ることが多い。特にニュース番組は実際に起こった事件や出来事を伝えるものとして、人々の有用な情報源としての役割を担ってきた。しかし、このような事実を扱うニュース番組でさえ現実世界をそのまま報道しているとは言い切れない。三上 (1988) は、ニュースの内容分析研究を概観し、それらの研究から「技術的制約や編集方針、イデオロギー性を帯びたニュースの価値判断、などにもとづいて選択的に構成される結果、しばしば無意図的な歪曲が生じる、ということが明らかにされている」と述べている。

また、ニュースに限らずテレビ番組はその構成された中に様々な性質の描写を含み、それによって視聴者は様々な影響を受ける可能性がある。特に暴力描写は青少年の反社会的な行為を助長する可能性があり、日本でも近年、その影響に対する関心が高まってきている (湯川 2003)。

以上のように、ニュース番組は構成されたものであり、視聴者に悪影響を与える暴力描写も含むため、ニュース番組の情報を能動的に読み解いていく必要がある。この「メディアを主体的に読み解く能力」はメディア・リテラシーの一側面であり、このメディア・リテラシーを教育するためには、メディアがどのようなメッセージを伝えているのかといった情報を得なければならない。

また、社会的に望ましい内容は、社会的に望ましい行為、「向社会的行為」を促進する可能性が示唆されており、テレビメディアの道徳教育における利用可能性を探る上で向社会的行為の描写に関する検討も必要である (山下 1996)。

このような状況を踏まえて、本稿ではメディア構成に関する実証的な資料を得るため、内容分析を用いて、以下の2点についてニュース番組の暴力および向社会的行為の描写を検討した。

第一に、暴力および向社会的行為の描写の影響は、その描写に繰り返し接触することによって生じるため、これらの描写をニュース番組がどのような頻度で含むのかを検討した。

第二に、これらの描写がどのような文脈で描かれているかという情報も検討した。社会的学習理論 (BANDURA 1973) によれば、暴力描写であっても行為に罰が与えられたものや、行為が正当化されないものは暴力的な行動や態度の学習を抑制するとされる。一方、向社会的行為描写については、その行為の成果が

2005年4月4日受理

[†] Yukiko HORIUCHI*, Makiko SADO*, Kanae SUZUKI**, Mari HASEGAWA* and Akira SAKAMOTO*: The Portrayals of Antisocial and Prosocial Behavior in Japanese News programs.

* Ochanomizu University 2-1-1, Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo, 121-8610 Japan

** University of Tsukuba 1-2, Kasuga Tsukuba, Ibaraki, 350-8550 Japan

成功する方向に描かれていれば向社会的行為の学習を促進させ、失敗が描かれれば学習を抑制する可能性がある。即ち、描写の文脈によってメディアの持つメッセージの性質に変動が生じるため、文脈の理解はメディア・リテラシーを教育するために欠かせないものであると考えられる。

したがって、本稿ではニュース番組の暴力および向社会的行為の描写の頻度とその文脈について分析し、メディア・リテラシー教育に必要な情報を得ることを目的とした。

2. 方 法

2.1. 分析対象番組

特別な番組編成が行われる可能性の低い2004年1月13日から1月19日をサンプル・ウィークに設定し、この期間に公共放送局1局（NHK 総合）と民間放送局5局（日本テレビ、TBS、フジテレビ、テレビ朝日、テレビ東京）を通じて東京で6時から23時に放送された番組を録画した。その結果、抽出された番組の中から、ニュース番組のジャンルにあたるもの（ワイドショーも含む）を分析対象とした。

2.2. 分析方法

(1)分析レベル

National Television Violence Study (1996-1998, 以下、NTVS と略す) の手続きに従い、(1)行為、(2)セグメント、(3)番組の3つのレベルを設定し、コード化を行った。行為レベルを最小単位として、セグメントレベルは行為を内包する単位であり、番組レベルは複数のセグメントを含む単位となっていた。セグメントは、1つの番組の中で話題や登場人物などで区別される首尾一貫したストーリー1つをその1単位とした。例えば、イラク戦争のニュースと選挙のニュースが続いて報道された場合にはイラク戦争と選挙は別個のセグメントとして捉えた。

(2)定義および分析項目

暴力の項目はNTVSのコード化マニュアルを翻訳したものであり、向社会的行為の項目はNTVSを参考に本研究で独自に作成したものであった。紙面の都合上、分析項目については結果と考察で触れるものだけを以下に記した。

暴力は、NTVSの定義に基づき、「相手に身体的な被害をもたらすことを意図して、切迫した脅威を与えたり、実際に力を行使する行為」と定義した。「具体的な暴力行為」や、「切迫した脅威」、「被害結果」、「事

故」のいずれかにあてはまるものが映像あるいはアナウンスの形で表現されたものをコード化の対象とした。

暴力描写の文脈については、行為レベルでは「行為の理由」についてコード化した。「生命の保護」、「怒り」、「報復」、「個人的利益」、「気ばらし」、「精神障害」、「事故」、「その他」の8種類のカテゴリから選択した。また、セグメントレベルでは行為に対する罰についてコード化した。「自己による非難」、「他者からの非難」、「非暴力行為による罰」、「暴力行為による罰」の4種類の罰についてその有無を検討した。

一方、向社会的行為は、「援助行動を中心とした愛他的行動」として定義した。高木(1982)の7分類（「寄付・奉仕行動」、「分与・共有行動」、「緊急事態における援助行動」、「努力を必要とする援助行動」、「迷子や遺失物に対する援助行動」、「社会的弱者に対する援助行動」、「小さな親切行動」）にそった行為をコード化の対象とした。

描写の文脈については、行為レベルで「成果の描写」についてコード化した。「描写なし」、「成功の描写あり」、「失敗の描写あり」の3つのカテゴリから選択した。

2.3. 手続き

コーダー28名は、コード化の基準を習得するために事前講習を20時間以上受講し、評価を行った。コード化は、コーダーが各自で都合の良い時間帯・場所で行った。

対象番組1番組につき1人のコーダーが担当した。さらに、一致率の算出のため、同様の講習を受けたコーダー1名に分析対象番組の約10%におよぶ3番組(360分)を分析してもらった。その結果、暴力の行為レベルの一致率は.88、セグメントレベルでは.91であった。一方、向社会的行為の行為レベルの一致率は.94、セグメントレベルでは.96であった。

3. 結 果 と 考 察

3.1. 分析対象番組の概要

分析した番組数は57本で、放送時間にすると3269分(54時間29分)となった。番組の放送時間が5分から150分のものまで様々なものが含まれていた。放送局別にみると、NHK 総合14本(256分)、日本テレビ9本(780分)、TBS 8本(744分)、フジテレビ11本(727分)、テレビ朝日7本(610分)、テレビ東京8本(152分)となった。

3.2. 暴力と向社会的行為の描写数

分析対象番組57本のうち、暴力描写を含む番組は42本あり、比率にすると73.7%となった。そして、描写される暴力行為数は131件であり、1番組平均2.3件と

表1 暴力描写数と向社会的行為の描写数

	番組数	行為数	セグメント数
暴力	42	131 (2.3)	76 (1.3)
向社会	16	32 (0.6)	24 (0.4)

註:括弧内の数値は1番組あたりの平均である。N=57

なっていた(表1)。また、暴力を含むセグメント数は76件であり、1番組平均1.3件であった(表1)。

分析対象番組57本のうち、向社会的行為の描写を含む番組は、16本あり、比率にすると28.0%となった。向社会的行為数は32件、向社会的セグメント数は24件となった(表1)。暴力描写の数と比較すると、向社会的行為の描写の頻度は非常に少なかった。

3.3. 暴力描写の文脈

暴力を行った理由については、「その他」の場合が41件(33.1%)あり、これは動機の究明が終わっていない場合など動機についての情報が伝えられないことがあったためと思われる。これ以外の動機についての言及がある場合を見ると、「個人的利益」の場合が46件(37.1%)で最も多く見られた。それ以外の理由の場合はどれも10%以下であった。

次に罰の描写は暴力描写全体(76件)の44.7%に現れていた(表2の中央左下)。罰の種類別にみると、他者からの非難や逮捕などの非暴力行為による罰が多かった(表2の中央左)。さらに、トピックが犯罪であるニュースに限れば(24件)、罰の描写ありの場合は58.3%にのぼり、非暴力行為による罰がある場合は40%以上になった(表2の右)。

社会的学習理論(BANDURA 1973)によれば、暴力描写であっても行為に罰が与えられたものや、行為が正当化されないものは暴力的な行動や態度の学習を抑制するとされる。したがって、上記の結果は、ニュース

表3 向社会的行為の成果描写(行為レベル)

	度数	%
成功描写あり	12	36.4
失敗描写あり	3	9.1
描写なし	18	54.6
合計	33	100.0

番組には暴力的な行動や態度の学習を抑制する要素が見られることを示唆するものであるといえた。

3.4. 向社会的行為の描写の文脈

行為の成果についての描写をみると、行為が失敗する場合は(9.1%)、成功する場合は(36.4%)で失敗する場合よりは成功する場合の方が多かった(表3)。しかし、成果そのものが描写されていない場合が最も多いという結果が得られた(54.6%)。

向社会的行為描写は、その行為の成果が成功する方向に描かれていれば向社会的行為の学習を促進させ、失敗が描かれれば学習を抑制する可能性がある(BANDURA 1973)。したがって、ニュース番組には、向社会的学習を抑制する要素は少なく、向社会的学習を促進する要素がある程度見られるということが示されたといえた。

3.5. 他の番組ジャンルとの比較

ニュース番組にはどのような特徴があるのか検討するため、本研究と同様にNTVSの手続きに基づき日本のドラマ、映画、バラエティ、アニメ、子供番組の5ジャンルの内容を分析した先行研究(佐渡ら 2004a,b, 長谷川ら 2004)との比較を行い、ニュース番組の特徴を考察した。

暴力と向社会的行為の描写数に関しては、暴力描写数の方が多いという結果は子ども番組のジャンルを除いて全ての番組ジャンルで共通していた(佐渡ら

表2 暴力行為への罰(セグメントレベル)

罰の種類	暴力描写全体(N=76)		犯罪のみ(N=24)	
	描写なし	描写あり	描写なし	描写あり
自己非難	72 (94.7)	4 (5.3)	24 (100.0)	0 (0.0)
他者非難	56 (73.7)	20 (26.3)	17 (70.8)	7 (29.2)
非暴力行為	60 (78.9)	16 (21.1)	14 (58.3)	10 (41.7)
暴力行為	72 (94.7)	4 (5.3)	23 (95.8)	1 (4.2)
罰・全体	42 (55.3)	34 (44.7)	10 (41.7)	14 (58.3)

2004a).

暴力描写の文脈に関しては、暴力の理由が「個人的利益」などの正当性の低いものが多いという結果がどのジャンルでも共通して見られた（佐渡ら 2004b）。しかし、罰の描写については、以下のような他のジャンルとの違いがあった。

罰の描写については、ニュース以外のジャンルでは罰がある場合が15%であった（佐渡ら 2004a）。この結果と比較すると、ニュース番組では特に犯罪に関わる暴力行為については罰の存在をより多く描いていることが分かる。したがって、ニュース番組では罰の描写による暴力の学習を抑制する効果が他のジャンルの番組より期待できると思われる。

向社会的行為の描写については、ニュース以外のジャンルでは、向社会的行為の成功の描写が65.3%で、描写がない場合（22.7%）や失敗の描写の場合（12.0%）よりも多かったという結果が得られていた（長谷川ら 2004）。この結果と比較すると、ニュース番組での成功の描写はより少なく、他ジャンルの向社会的行為描写の方が、向社会的行為の学習の上ではより有効であると考えられる。

4. ま と め

本研究の結果をまとめると以下ようになった。

- ①暴力描写については、対象番組の7割に含まれており、具体的行為や被害結果を描いていた。一方、向社会的行為描写は、対象の3割弱に含まれており、暴力描写と比べると数が少なかった。
- ②ニュース番組の暴力描写の文脈は、暴力を行う理由の正当性が低く、他者からの非難や逮捕など非暴力による罰が見られるなど暴力の学習を抑制する要素を含んでいた。この特徴は他のジャンルの番組よりも多かった。
- ③ニュース番組の向社会的行為描写の文脈は、行為の学習を促進する要素を含んでいるものの、他のテレビジャンルのものよりも少なかった。

以上のように、本研究は、内容分析によってメディア・リテラシー教育で使う上で着目すべき点を示したことによって教育工学的意義があると思われる。ニュースは向社会的行為を扱ったニュースよりも暴力を扱ったニュースを多く報道する傾向にあることはJOHNSON（1996）の内容分析研究によって示されており、本研究の結果は日本のニュース番組の構成においてもこの傾向があり、ニュースも構成されたものであ

ることを教える材料となりうると思われる。今後は縦断的内容分析研究を通じて時間的変化に左右されないニュース番組の構成をさらに詳しく把握していくことが望まれるだろう。

付 記

本研究は、文部省科学研究費補助金基盤研究(A)(2)（課題番号15203026、代表：坂元章）および財団法人放送文化基金の研究助成を受けている。また NHK 放送文化研究所“子どもに良い放送”プロジェクトからの研究協力を得ており、ここに記して感謝申し上げる。

参 考 文 献

- BANDURA, A. (1973) *Aggression : A social learning analysis*. Englewood Cliffs, NJ : Prentice Hall
- 長谷川真理, 佐渡真紀子, 鈴木佳苗, 堀内由樹子, 坂元章 (2004) テレビ番組における暴力および向社会的行為の描写(4) 一向社会的行為描写の分析一. 日本社会心理学会第45回大会(北星学園大学)発表論文集 : 588-589
- JOHNSON, R. N. (1996) Bad News Revisited: The Portrayal of Violence, Conflict, and Suffering on Television News. *Journal of Peace Psychology*, 2(3) : 201-216
- 三上俊治 (1988) 放送メディアの内容分析 —その方法論的考察—. 放送学研究, 38 : 101-118
- National Television Violence Study* (vol.1 ~ 3) (1996-1998) Sage, CA
- 佐渡真紀子・鈴木佳苗・坂元章 (2004a) テレビ番組における暴力および向社会的行為描写の分析. 日本教育工学会論文誌, 28 : 77-80
- 佐渡真紀子・鈴木佳苗・坂元章 (2004b) テレビ番組における暴力描写および向社会的行為の描写(2) —暴力描写の行為レベルでの分析—. 日本社会心理学会第45回大会(北星学園大学)発表論文集 : 700-701
- 高木修 (1982) 順社会的行動のクラスターと行動特性年報社会心理学. 23 : 135-156
- 山下玲子 (1996) テレビが子どもの向社会的行動に及ぼす影響に関する研究についての一考察—研究の概観として. マス・コミュニケーション研究, 49 : 161-179
- 湯川進太郎 (2003) テレビと暴力 坂元章(編) メディアと人間の発達. 学文社, 東京 : 41-57

(Received April 4, 2005)